

日米中学校家庭科教科書の内容に関する大学生の有用感

入江和夫・大森悠佳*・藤本有紀子*

Utility for College Students about Contents of Japan and U.S. Homemaking
Course Textbook

IRIE Kazuo, OOMORI Yuka, FUJIMOTO Yukiko

(Received September 25, 2015)

キーワード：自立、家庭科、有用感、大学生、教科書

1. はじめに

大学生になれば高校生と違って、生活に大きな変化がある。親元から離れ、アパートなどの生活、自炊のための食事、室内の掃除や衣服の洗濯などを行う必要がある。生活管理も自分自身で行わなければならない、不十分であれば、健康にも大きく影響する。特にアルバイトなどをする学生も多く、時間や金銭の管理も必要とされる。また同級生は地元の慣れ親しんだ仲間というわけではなく、遠方からの仲間も多くなり、他者との関わりは苦勞するのではないかと考えられる。さらに大学生は社会人になることを見据え、どのような仕事につきたいかなど就職の悩みも多い。

名古屋大学では新入生に「生活のリズムを崩さない」「栄養のあるものを食べ、体調を崩さない」「夜寝る時間、朝起きる時間を一定にする」「時間は無限ではない」「アルバイトは週15時間以内」「毎日、体を動かす習慣をつける」「清潔な身なりをする」などを具体的にwebでアドバイスしている。まさに大学とは社会で自立して生きる力を養うところである。

ここでは大学生が今の生活から振り返って生活の自立を目標とする家庭科の内容について、どの程度、有用感があるかなどを探ることを目的とする。調査項目は日本の中学校家庭科教科書（東京書籍2004）の全単元および、米国の中学校家庭科教科書（Teen Living）にある「生活管理」、「健康」、「仕事」、「他者との関わり」、「金銭の管理」の単元を参照して作成し、これらが「今のあなたにとって、どの程度の有用感（＝意義や価値）があると思いますか」を問うことで、大学生の家庭科有用感の程度を明らかにし、その理由も調査した。さらに因子分析、クラスタ分析することで大学生の特徴を明らかにしたので以下に述べていく。

2. 調査方法

- (1) 時期 平成27年6月22日、24日
- (2) 対象 男子85名、女子64名（国立Y大学1年生：共同獣医学部、農学部、理学部、工学部、人文学部、経済学部、教育学部生の中から空欄がある者を除く）
- (3) 内容

* 山口大学大学院教育学研究科院生

- 1) 「設問：①～⑰に、あなたが中学生のときに出版された家庭科教科書（T社）の全項目（内容）と米国中学校家庭科教科書の項目（内容）を示しました。各項目（内容）は今のあなたにとって、どの程度の有用感（＝意義や価値）があると思いますか？1つ○をつけ、その理由もお書きください。（6件法：1全くない、2ない、3ややない、4ややある、5ある、6かなりある）
- 2) 東京書籍「中学校技術・家庭」（平成17年版）の単元：「わたしたちの食生活」「わたしたちの食品の選択と調理」「わたしたちのより豊かな食生活」「わたしたちの衣生活」「わたしたちの衣服製作」「わたしたちの生活と住まい」「わたしたちの成長と家族・地域」「幼児とのふれあい」「わたしたちの消費と環境」「わたしたちのよりよい生活」
- 3) 米国中学校家庭科教科書「TEEN LIVING」（1991）の単元：「自分自身をながめてみよう」「生活管理」「健康」「他者との関わり」「家族」「仕事」「金銭の管理」
- (4) 統計ソフト：SPSS ver. 22

3. 結果と考察

(1) 中学校家庭科の有用感

家庭科の単元に関して、大学生の有用感（＝意義や価値）がどの程度あるのかを把握するため、大学1年生が使用していた時期の中学校技術・家庭科（東京書籍、平成17年版）の単元項目およびアメリカ中学校家庭科教科書単元の一部項目からなる調査を行うことにした。家庭科有用感17項目について、男女の意識の違いをt検定で分析した結果を表1に示し、表2には各項目に関する「その理由」の自由記述の一部を示した。

表1 項目の平均値

(6件法：1全くない、2ない、3ややない、4ややある、5ある、6かなりある)

項目	男(n=85)		女(n=64)		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
①自分自身をながめてみよう(A)	4.01	1.33	4.11	1.04	0.485
②生活管理(A)	4.29	1.32	4.30	1.27	0.013
③健康(A)	4.72	1.25	4.78	1.00	0.334
④わたしたちの食生活	4.88	1.05	4.94	1.08	0.313
⑤わたしたちの食品の選択と調理	4.53	1.18	4.78	1.06	1.345
⑥わたしたちより豊かな食生活	4.06	1.35	4.42	0.83	2.023*
⑦わたしたちの衣生活	4.02	1.05	4.08	1.07	0.312
⑧わたしたちの衣服製作	2.79	1.26	3.09	1.27	1.458
⑨わたしたちの生活と住まい	4.15	1.18	4.16	1.01	0.018
⑩わたしたちの成長と家族・地域	3.74	1.36	4.28	0.97	2.837**
⑪他者との関わり(A)	4.41	1.19	4.52	1.08	0.548
⑫家族(A)	4.22	1.37	4.28	1.13	0.274
⑬幼児とのふれあい	3.45	1.41	4.19	1.05	3.671***
⑭わたしたちの消費と環境	4.12	1.07	4.44	0.83	1.976*
⑮仕事(A)	4.31	1.31	4.39	1.14	0.414
⑯金銭の管理(A)	4.74	1.10	4.73	1.06	0.038
⑰わたしたちのよりよい生活	4.13	1.36	4.33	0.94	1.052

1) t検定：*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

2) A: 米国中学校家庭科教科書

表2 中学校家庭科教科書(日米) 単元における有用感の理由

①自分自身をながめてみよう(A)	⑩わたしたちの成長と家族・地域
a 自分自身を知ること将来のことを考えることができるから	a 自分が子育てをする立場になった時に役立つから
b 自分のこれからを考える上で指針になるから	b 幼い頃を振り返ったりするのは今後の自分にも役に立つと思うから
c 就職先をどこにするか決定するとき重要だと思うから	c 人との関わりは大切だから
d 意識することがないから	d 結婚願望のある人は必要だと思うけれどもない人にとっては全く必要ないことだと思う
e 自分のことはたいてい分かっている	e 今はあまり関係ないから
②生活管理(A)	⑪他者との関わり(A)
a 時間の管理は社会人にとって必要だし、一人暮らしをしていて大切だと思ったから	a 社会に出る上で大切になることだと思う
b 大学生になって時間の管理をきちんとしなければならぬと思うから	b 大学に入るといろいろな世代の人と関わるから
c 仕事等で大切になってくるから	c 社会に出ても大事
d 学んでもあまり実践しない	d 理解はしているが難しい
e 自分のしたいときにすればいい	e 教えられるものではないから
③健康(A)	⑫家族(A)
a 一人暮らしだから自分で管理しなければならないから	a 家族の形態も複雑化し、一人ひとりがそれらを理解する必要があるから
b 下宿を始めてから健康管理をすることの難しさを知ったから	b 将来に生かせそうだから
c これからの暮らし、今でも常に学習を続けていくべき内容だと思うから	c 一人暮らしをして家族の大切さが分かった
d 管理していないけれど元氣	d 家族のことをあまり考えないから
e 体調を崩すことはない	e 家族に関心がないから
④わたしたちの食生活	⑬幼児とのふれあい
a 病気対策になるから。自炊をする上で欠かせない知識だから	a 自分に子供が出来た時に必要になってくると思う
b 一人暮らしをしていると、栄養バランスが崩れてしまったので、食事を考えることが必要だと思うから	b 将来子どもを持った時に役立つと思うから
c 一人暮らしではとても重要だから	c 子育てに役立つ
d 野菜食べてない。まず夕食作るのがめんどう。	d 幼児に興味がないから
e 食べればみんな同じ	e 幼児とふれあう機会があまりないため
⑤わたしたちの食品の選択と調理	⑭わたしたちの消費と環境
a 自炊をする上で欠かせない知識だから	a 今の私たちは消費生活をもう一度見直す必要があると思う
b 一人暮らしで料理を楽しんでいるから	b 環境問題についてよく考えるため
c 自炊を始めてからすべて1から自分で考えるので必要と思ったから	c 自分で買い物をすることが多くなったから
d 自炊していないから	d あまり考えたことがない
e 安さしか見ていない	e 基本的なことくらいは分かる
⑥わたしたちより豊かな食生活	⑮仕事(A)
a 楽しく食事すればストレスが減りそう	a 進路を定める上で大切なことだから
b 自炊する上で役立つから	b 自分の人生に関わるから
c みんなでの食事は心身を楽しませられるから	c 将来役立つと思うから
d 食事はひとりでしたい派なので	d 家庭科で勉強する必要はあまりない
e とりあえず、食べているだけだからあんまり意識していない	e 進路決定の時に自然に考えた
⑦わたしたちの衣生活	⑯金銭の管理(A)
a 大学生は基本私服だし、一人暮らしをしたときに自分で補修が出来たほうがいいから	a 一人暮らしをしてお金の大切さがわかったから
b 見た目は大事、人の性格も見た目印象付けられそうだから	b 一人暮らしに大切だから
c 学生らしい服装に心がけたいから	c お金の管理をすることは将来的に大事だから
d 衣服についての知識は特に必要を感じない	d お金の管理くらいできる
e 重要性を感じないから	
⑧わたしたちの衣服製作	⑰わたしたちのよりよい生活
a 自分で作ることで服の構造を知ることができたから	a 周りの人達とのふれあいは大切だから
b 楽しそうだし達成感がありそう	b 資源を大切にすることを学ぶのは有意義
c 衣服を作れることも役に立つと思うから	c 地球のことを考えて行動したいから
d 一人暮らしをする上であまり必要のない知識だから	d そこまで地域のふれあいは好きでない
e 既製品で間に合うから	
⑨わたしたちの生活と住まい	
a 一人暮らしをしたとき、家庭を持ったときに大切になってくると思うから	
b 下宿先を選ぶ上で大切なことだから	
c 身を守るために必要	
d 住まいについて必要性を感じない	
e 重要性を感じないから	

1) A:米国家庭科教科書 2) a~c:有用感程度4以上の理由、d,e:有用感程度3以下の理由

単元「①自分自身をながめてみよう(A)」は米国の中学校家庭科教科書にあり、ここには「自分自身を知ろう」「成長と変化」「明瞭な決定を下す」の内容が含まれている。男子の有用感平均は4.01、女子は4.11であり、両者とも有用感が「4ややある」付近にあり、性差はなかった。肯定(選択肢4以上選んだ学生)の理由としてa「自分自身を知ること将来のことを考える

ことができるから」などがあり、自分を見つめることが、これからの就職先をどうするかなどの意思決定に役立つとしている。一方否定（選択肢3以下を選んだ学生）の理由としてd「意識することがないから」などがあった。

単元「②生活管理」も米国教科書にあり、ここには「管理とは何?」「時間の管理」「学習管理」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.29、女子は4.30であり、両者とも有用感が「4 ややある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「時間の管理は社会人にとって必要だし、一人暮らしをしていて大切だと思ったから」などがあり、これからの社会人として必要な内容だと考えている。一方否定の理由としてd「学んでもあまり実践しない」などがあった。

単元「③健康」も米国教科書にあり、ここには「毎日の健康」「心の健康」「健康管理」「物質乱用について学習しよう」「非常事態と救助・援助」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.88、女子は4.94であり、両者とも有用感が「5ある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「一人暮らしだから自分で管理しなければならぬから」などがあり、これから社会人となるには必要な内容だと考えている。一方否定の理由としてd「管理していないけれど元気」などがあった。

単元「④わたしたちの食生活」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「食事のとり方を考えよう」「栄養素のはたらきを知ろう」「食品に含まれる栄養素を知ろう」「バランスのとれた食生活を考えよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.88、女子は4.94であり、両者とも有用感が「5ある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「病気対策になるから。自炊をする上で欠かせない知識だから」などがあり、自立した生活には必要な内容だと考えている。一方否定の理由としてd「野菜食べてない。まず夕食作るのがめんどろ。」などがあった。

単元「⑤わたしたちの食品の選択と調理」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「食品の選び方を考えよう」「食事づくりに挑戦しよう」「よりよい食生活について」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.53、女子は4.78であり、両者とも有用感がほぼ「5ある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「自炊をする上で欠かせない知識だから」などがあり、自立した生活には必要な内容だと考えている。一方否定の理由としてd「自炊していないから」などがあった。

単元「⑥わたしたちより豊かな食生活」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「日常食を見直そう」「地域の食材を使って調理しよう」「楽しい会食をしよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.06、女子は4.42であり、両者とも有用感が「4 ややある」付近にあり、女子の方が高かった。肯定の理由としてa「楽しく食事すればストレスが減りそう」などがあり、家庭生活における食事の役割を考えている。一方否定の理由としてd「食事はひとりでしたい派なので」などがあった。

単元「⑦わたしたちの衣生活」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「衣服のはたらきを考えよう」「衣服を選ぼう」「衣服の手入れと補修をしよう」「衣服の計画と再利用について」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.02、女子は4.08であり、両者とも有用感が「4 ややある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「大学生は基本私服だし、一人暮らしをしたときに自分で補修が出来たほうがいいから」などがあり、一人暮らしの際の有用感を示していた。一方否定の理由としてd「衣服についての知識は特に必要を感じない」などがあった。

単元「⑧わたしたちの衣服製作」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「衣服の構成を知ろう」「製作の計画を立てよう」「つくってみよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が2.79、女子は3.09であり、両者とも有用感が「3 ややない」付近にあり、性差はなかった。

肯定の理由としてa「自分で作ることで服の構造を知ることができたから」などがあり、ものづくりの良さによる有用感を示していた。一方否定の理由としてd「一人暮らしをする上であまり必要のない知識だから」などがあつた。

単元「⑨わたしたちの生活と住まい」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「幼い頃ってどうだったろう」「幼児の生活と遊びを知ろう」「幼児の心身の発達の特徴を知ろう」「子どもにとっての家族を考えよう」「中学生にとっての家族を考えよう」「家族と地域のかかわりを考えよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.15、女子は4.16であり、両者とも「4 ややある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「一人暮らしをしたとき、家庭を持ったときに大切になってくると思うから」などがあり、これからの生活に向けた有用感を示していた。一方否定の理由としてd「住まいについて必要性を感じない」などがあつた。

単元「⑩わたしたちの成長と家族・地域」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「住まいのはたらきとは何だろう」「家族と住まいのかかわりを考えよう」「健康で心地よく住むために」「安全に住むためにはどうしたらよいだろう」「よりよい住まいと住み方を考えよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が3.74、女子は4.28であり、両者とも「4 ややある」付近にあり、女子の方が高かった。肯定の理由としてa「自分が子育てをする立場になった時に役立つから」などがあり、将来の家庭人としての有用感を示していた。一方否定の理由としてd「結婚願望のある人は必要だと思うけれどもない人にとっては全く必要ないことだと思う」などがあつた。

単元「⑪他者との関わり(A)」は米国教科書にあり、ここには「円滑なコミュニケーション」「強いつながり」「デート」「あなたとあなたの地域社会」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.41、女子は4.52であり、両者とも「4 ややある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「社会に出る上で大切になることだと思う」などがあり、社会人となることを展望した有用感を示していた。一方否定の理由としてd「理解はしているが難しい」などがあつた。

単元「⑫家族(A)」は米国教科書にあり、ここには「家族と社会」「家族のメンバーとあなた」「家族のライフサイクル」「家族の危機」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.22、女子は4.28であり、両者とも「4 ややある」付近にあり、性差はなかった。肯定の理由としてa「家族の形態も複雑化し、一人ひとりがそれらを理解する必要があるから」などがあり、家族形成に向け、家族関係理解の必要性を示していた。一方否定の理由としてd「家族のことをあまり考えないから」などがあつた。

単元「⑬幼児とのふれあい」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「幼児が楽しく生活できるために」「幼児とのかかわり方を工夫しよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が3.45、女子は4.19であり、男子では「3 ややない」～「4 ややある」にあり、女子では「4 ややある」付近にあり、女子の有用感の方が高かった。肯定の理由としてa「自分に子供が来た時に必要になってくると思う」などがあり、家族形成に向けた必要性を示していた。一方否定の理由としてd「幼児に興味がないから」などがあつた。

単元「⑭わたしたちの消費と環境」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「消費生活について考えよう」「消費者としての自覚をもとう」「生活の中で環境への影響を考えよう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.12、女子は4.44であり、両者とも「4 ややある」付近にあるが、女子の有用感の方が高かった。肯定の理由としてa「今の私たちは消費生活をもう一度見直す必要があると思う」などがあり、消費生活改善の必要性を示していた。一方否定の理由としてd「あまり考えたことがない」などがあつた。

単元「⑮仕事(A)」は米国家庭科教科書にあり、ここには「仕事の決定」「仕事への準備」「あ

あなたが望む仕事につく」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.31、女子は4.39であり、両者とも「4 ややある」付近にあるが、性差はなかった。肯定の理由としてa「進路を定める上で大切なことだから」などがあり、どのような社会人になるのか、その方向づけの必要性を示していた。一方否定の理由としてd「家庭科で勉強する必要はあまりない」などがあつたが、義務教育が終了となる中学生の時からどのような社会人を目指すかのキャリア教育を家庭科で家族の協力とともに行うことは重要である。

単元「⑩金銭の管理(A)」は米国家庭科教科書にあり、ここには「財産としてのお金」「使用計画」「金銭管理サービス」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.74、女子は4.73であり、両者とも「5 ある」付近にあるが、性差はなかった。肯定の理由としてa「一人暮らしをしてお金の大切さがわかったから」などがあり、半分自立している大学生の経験からの必要感を示していた。一方否定の理由としてd「お金の管理くらいできる」などがあつた。

単元「⑪わたしたちのよりよい生活」は日本の家庭科教科書にあり、ここには「環境や資源を考えて生活しよう」「地域の人々とふれあおう」の内容が含まれている。男子の有用感平均が4.13、女子は4.33であり、両者とも「4 ややある」付近にあるが、性差はなかった。肯定の理由としてa「周りの人達とのふれあいは大切だから」などがあり、地域社会との関わりの重要性を示していた。一方否定の理由としてd「そこまで地域のふれあいは好きでない」などがあつた。

米国家庭科教科書の単元「自分自身をながめてみよう」「生活管理」「健康」「他者との関わり」「家族」「仕事」「金銭の管理」の平均値は4.22～4.78と高いことから、日本の家庭科教科書にもこのような単元を入れてもよいのではないかと考えられる。

(2) 因子分析

項目⑥⑧⑬⑭⑰は選択であることから、これらを省いて因子分析を主因子法、プロマックス回転で行い、その結果を表3に示した。

表3 家庭科有用感の因子分析(主因子法、プロマックス回転)
(6件法:1全くない～6かなりある)

	因子I	因子II	因子III
因子I 社会生活($\alpha=0.825$)			
②生活管理	0.835	-0.117	0.122
⑩金銭の管理	0.816	-0.198	0.083
⑮仕事	0.635	0.071	0.018
①自分自身をながめてみよう	0.594	0.181	-0.175
③健康	0.450	0.203	0.201
II 家庭生活($\alpha=0.813$)			
⑩わたしたちの成長と家族・地域	-0.188	0.85	0.039
⑨わたしたちの生活と住まい	-0.111	0.655	0.251
⑫家族	0.300	0.625	-0.149
⑦わたしたちの衣生活	-0.030	0.583	0.083
⑪他者との関わり	0.360	0.514	-0.157
III 食生活($\alpha=0.839$)			
④わたしたちの食生活	0.160	-0.014	0.894
⑤わたしたちの食品の選択と調理	-0.045	0.124	0.762
因子寄与率(%)	36.75	49.25	56.18
因子間相関			
	I	II	III
	II	0.571	-
	III	0.352	0.106

3 因子構造であり、累積寄与率は56.18%であった。因子1は「生活管理」「金銭の管理」「仕事」など社会生活に向けた内容を示していることから「社会生活有用感」とネーミングした。因子2は「わたしたちの成長と家族・地域」「わたしたちの生活と住まい」など家庭生活に関する内容であることから「家庭生活有用感」とネーミングした。因子3は食生活に関する内容であることから「食生活有用感」とネーミングした。それぞれのクロンバッハ α は0.825, 0.813, 0.839であった。

(3) 因子得点

1) 平均値の比較

各因子得点の平均値を算出し、それらに違いがあるかを確かめるために1要因の分散分析を行い、その結果を表3に示した。

表3 因子得点(平均点)の一元配置分散分析

	平均値	SD
社会生活有用感(因子1=a)	4.44	0.916
家庭生活有用感(因子2=b)	4.18	0.880
食生活有用感(因子3=c)	4.77	1.019

$F(2,444)=15.05, p<0.001, c>a>b$

分析の結果、 $F(2,444) = 15.05, p < 0.001$ となり、各有用感に有意な差がみられた。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、大学生意識として c 「食生活有用感」 $> a$ 「社会生活有用感」 $> b$ 「家庭生活有用感」という結果が得られた。各平均値から有用感の程度は「4 ややある」以上であり、特に「食生活有用感」は「5ある」付近であることがわかった。

2) 因子得点の性差

各因子得点に性差があるかをt検定で確かめ、その結果を表4に示した。

表4 男女の家庭科有用感平均値

	男(n=85)		女子(n=64)		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
社会生活有用感(因子1=a)	4.41	0.96	4.46	0.86	0.318
家庭生活有用感(因子2=b)	4.11	0.95	4.26	0.78	1.044
食生活有用感(因子3=c)	4.71	1.02	4.86	1.01	0.909

「食生活有用感」、「社会生活有用感」、「家庭生活有用感」に性差はなかった。

(4) 大学生のグループ分け

各有用感に関して大学生はどのような特徴をもった集団なのかを把握するために、変数に各因子得点を入れ、ward法で階層クラスタ分析を行った(小塩真司2006)。Rescaled Distance Cluster Combine が10のところで、学生の集団は3タイプに分類することができ、それらを図1に示した。

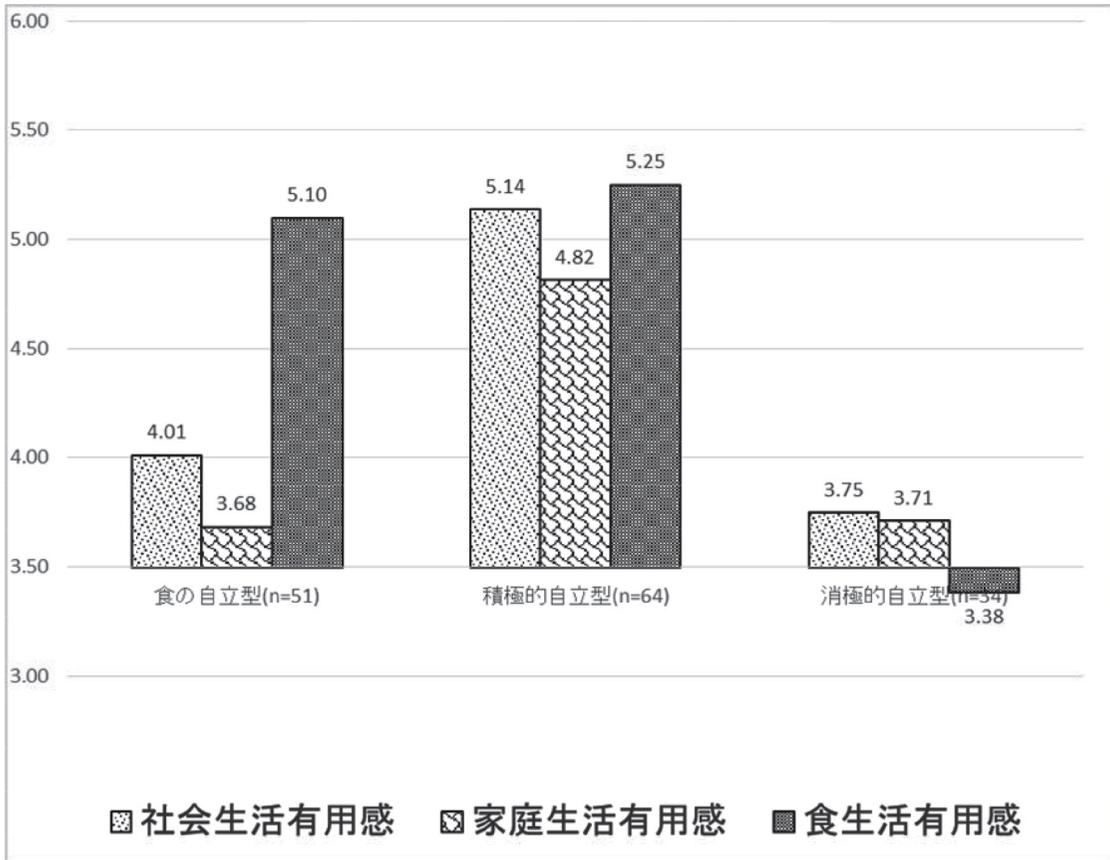


図1 大学生の家庭科有用感タイプ

6件法であることから3.5を基準としたグラフにした。家庭科の有用感の高さは大学生の自立意識に依存すると考え、この観点からグループをネーミングした。クラスタ1 (n=51)では「社会生活有用感」が4.01、「家庭生活有用感」が3.68、「食生活有用感」が5.10を示し、食生活の意識が極端に高いことから、この集団を「食の自立型」とした。クラスタ2 (n=64)では「社会生活有用感」が5.14、「家庭生活有用感」が4.82、「食生活有用感」が5.25を示し、生活全般にわたって有用感が高いことから、この集団を「積極的自立型」とした。クラスタ3 (n=34)では「社会生活有用感」が3.75、「家庭生活有用感」が3.71、「食生活有用感」が3.38を示し、有用感が全般的に低いことから、この集団を「消極的自立型」とした。

得られた3つのクラスタを独立変数、「社会生活有用感」「家庭生活有用感」「食生活有用感」を従属変数とした分散分析を行った結果、「社会生活有用感」 $F(2,146)=61.45, p<0.001$ 、「家庭生活有用感」 $F(2,146)=48.88, p<0.001$ 、「食生活有用感」 $F(2,146)=91.95, p<0.001$ のように共に有意な群間差が見られ、TurkeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「社会生活有用感」「家庭生活有用感」については「積極的自立型」>「消極的自立型」=「食の自立型」であり、「食生活有用感」については「積極的自立型」=「食の自立型」>「消極的自立型」という結果が得られた。

4. まとめ

生活の自立が目標である家庭科の内容に関して大学生の有用感を確かめるために、日米中学校家庭科教科書の単元について調査を行い、次のよう結果を得た。

(1) 日米家庭科教科書の単元の有用感について、「4 ややある」以上を示したのは17項目中、男子では14項目、女子では16項目あり、全般的に大学生の家庭科有用感が高いことがわかった。しかし、女子よりも平均が低い項目に注目すると単元「⑩わたしたちの成長と家族・地域」で男子(3.74)、「⑬幼児とのふれあい」で男子(3.45)があり、家庭建設において、父親と幼児との関わりは重要であるにもかかわらず、不安を感じさせる結果となった。また、米国家庭科教科書の単元「自分自身をながめてみよう」「生活管理」「健康」「他者との関わり」「家族」「仕事」「金銭の管理」の平均値は4.22~4.78と高いことから、日本の家庭科教科書にもこのような単元を組み入れてもよいのではないかと考えられる。

(2) 因子得点「社会生活有用感」「家庭生活有用感」「食生活有用感」の平均値は「4 ややある」以上であり、おおまかに見れば大学生は日米家庭科教科書にある単元の内容に関して、高い有用感を示した。

(3) クラスタ分析によって、大学生の有用感によるグループ分けを行った。全ての有用感が高い「積極的自立型」の学生は43% (n=64)、一方、全ての有用感が低い「消極的自立型」の学生は23% (n=34) いた。また「食生活有用感」が高い「食の自立型」の学生が34% (n=51) いることがわかった。後2者の「家庭生活有用感」の平均は3.68、3.71で低く、合計した学生数は57%もいることがわかった。言い換えれば、約6割の大学生が「家庭生活有用感」の構成項目「わたしたちの成長と家族・地域」「わたしたちの生活と住まい」「家族」「わたしたちの衣食生活」「他者との関わり」に関して、その意義や価値を肯定的に評価していない結果となった。

今後の家庭科教育について一考する。生活自立を目指している家庭科から考えれば、半ば自立した生活を送り始めている大学生にとって、家庭科の内容に意義や価値があると感じて欲しいところである。今回、調査用紙は学生が中学1年の際に使用した教科書である。この時(=平成10年文部省公示)の学習指導要領家庭分野の目標「実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。」は平成20年学習指導要領家庭分野の目標「衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。」となっている。大きく違うところは「これからの生活を展望して」であり、それは「これからの生活」=「生徒の自立した生活」から学習内容を見つめさせ、考えさせることが求められている。そこで、ここをさらに強く意図した授業をすることで、家庭科に高い有用感をもった学生が増えるのではないかと考えられる。

家庭科の有用感に関する調査

- 1 調査のねらい:生活の自立を目的とした家庭科の内容の改善に向け、課題を明らかにする
 2 対象:①～⑦に、あなたが中学生のときに出版された家庭科教科書(7社)の全項目(内容)と米国の中学校家庭科教科書の一部の項目(内容)を挙げました。
 各項目(内容)は今のあなたにとって、どの程度の有用感(=意義や価値)があると思いますか?1つ○をつけ、その理由もお書き下さい

<男=1、女=2> → <下宿生=1、実家生=2> → () 学部
 学年<1, 2, 3, 4> →

項目	全くない	ない	ややない	ややある	ある	かなりある	その理由
	1	2	3	4	5	6	
①自分自身をながめてみよう 内容 ・自分自身を知ろう ・成長と変化 ・明確な決定を下す							
②生活管理 内容 ・管理とは何? ・時間の管理 ・学習管理							
③健康 内容 ・毎日の健康 ・心の健康 ・健康管理 ・物質乱用について学習しよう ・非常事態と援助・援助							
④わたしたちの食生活 内容 ・食事のとり方を考えよう ・栄養素のはたらきを知ろう ・食品に含まれる栄養素を知ろう ・バランスのとれた食生活を考えよう							
⑤わたしたちの食品の選択と調理 内容 ・食品の選び方を考えよう ・食事づくりに挑戦しよう ・よい食生活をめざして							
⑥わたしたちのより豊かな食生活 内容 ・日常食を楽そう ・地域の食材を頼って調理しよう ・楽しい食食しよう							
⑦わたしたちの衣生活 内容 ・衣服のはたらきを考えよう ・衣服を調おう ・衣服の手入れと補修をしよう ・衣服の計画と再利用について考えよう							
⑧わたしたちの衣服製作 内容 ・衣服の構成を知ろう ・製作の計画を立てよう ・つくってみよう							
⑨私たちの生活と住まい 内容 ・住まいのはたらきとは何だろう ・家族と住まいのかかわりを考えよう ・健康で心地よく住むために ・安全に住むためにはどうしたらよいか ・よりよい住まいの住み方を考えよう							
⑩わたしたちの成長と家族・地域 内容 ・幼小到って、どんなだったろう ・幼児の生活と遊びを知ろう ・幼児の心身の発達の特徴を知ろう ・子どもとしての家族を考えよう ・中学生としての家族を考えよう ・家族と地域のかかわりを考えよう							
⑪他者との関わり 内容 ・円滑なコミュニケーション ・強いつながり ・チーム ・あなたとあなたの地域社会							
⑫家族 内容 ・家族と社会 ・家族のメンバーとあなた ・家族のライフサイクル ・家族の役割							
⑬他者とのふれあい 内容 ・幼児が楽しく生活できるために ・幼児とのかかわり方を工夫しよう							
⑭わたしたちの消費と環境 内容 ・消費生活について考えよう ・消費者としての自覚をしよう ・生活の中で環境への影響を考えよう							
⑮仕事 内容 ・仕事の決定 ・仕事への準備 ・あなたが選む仕事に就く							
⑯金銭の管理 内容 ・貯蓄としてのお金 ・収支計画 ・金銭管理サービス							
⑰わたしたちのよりよい生活 内容 ・環境や資源を考えて生活しよう ・地域の人々とふれあおう							

参考文献

佐藤文子ら (2004) . 新しい技術・家庭科、家庭分野 (東京書籍)

文部省(1998). 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編

名古屋大学. 「新入生のためのスタディティップス」

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/html/ji01/gakushu/ga01.html>

Susan Judge. 「TEEN LIVING」 Prentice Hall (1991)

小塩真司(2006). 「研究事例で学ぶSPSSとAMOSによる心理・調査データ解析」 東京図書